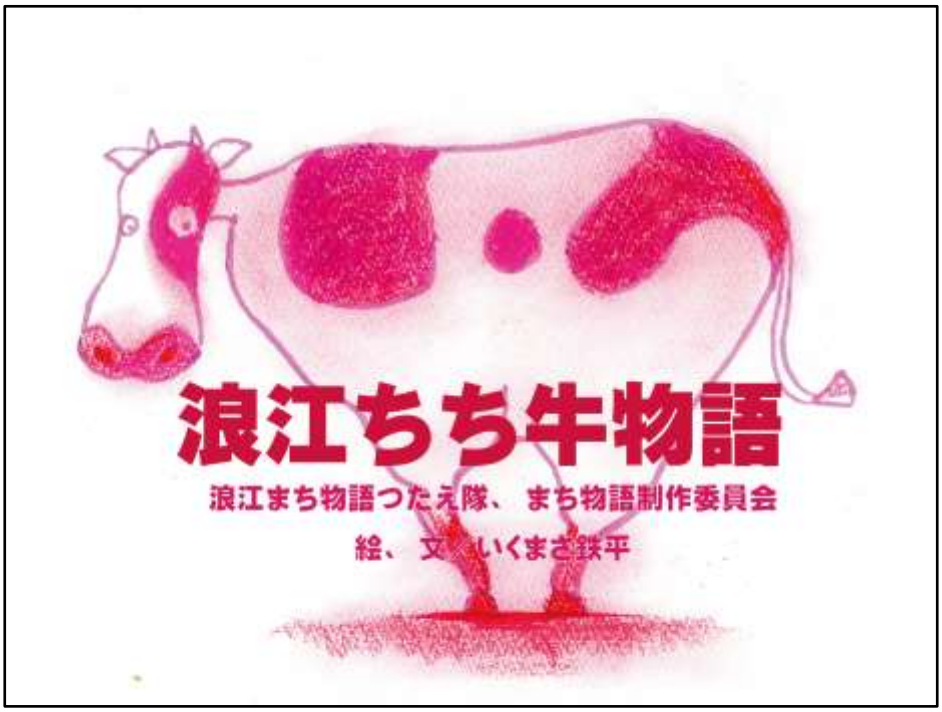
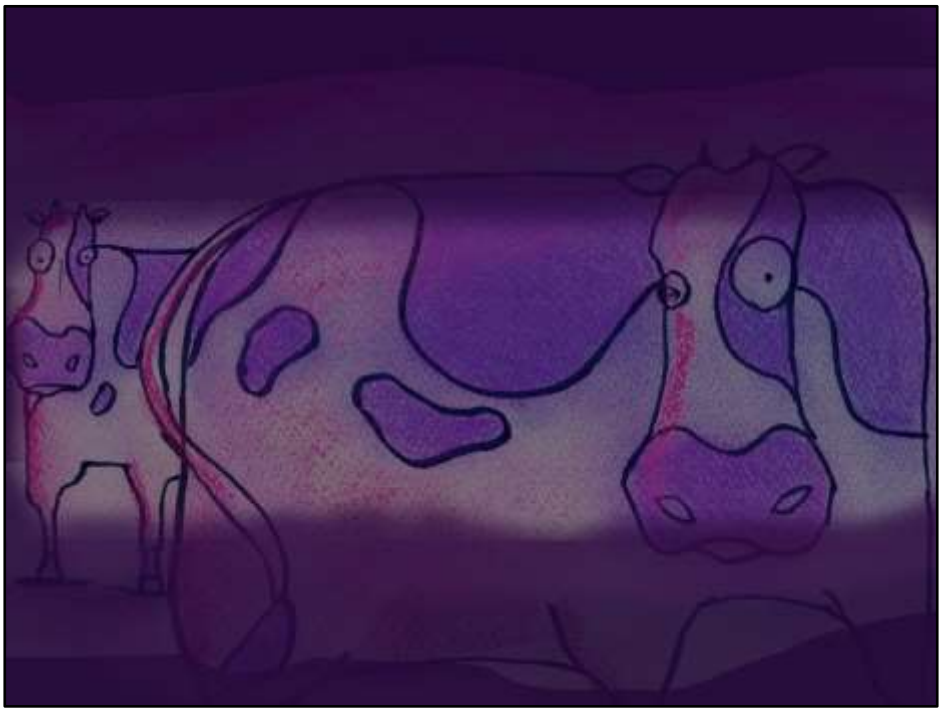

浪江ちち牛物語
浪江まち物語つたえ隊、 まち物語制作委員会
絵、 文 いくまさ鉄平

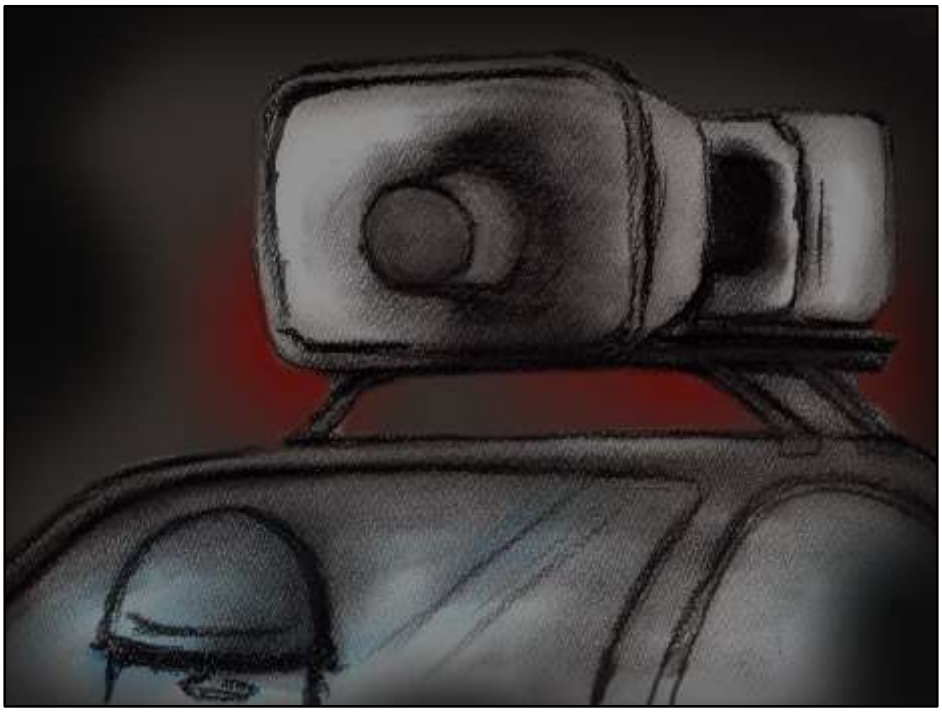


※目覚めたが眠気が取れず目があかない中で
乳牛1「モオオオ…ムニャムニャムニャ・・おはよう」
乳牛2「おはよってモオオオ…やっと、起きたんだべか？」
乳牛1「ムニャムニャムニャ・・ふあああ・・なんだあ・・・青い顔して、なんかあったか？」
乳牛2「なんかでねえよ。さっきの地震、気づかなかったのか」
乳牛1「地震って？また地震があっただか」
乳牛2「あったよ、昨日のに次ぐ、でっけいやつが。人間が「余震だ余震だ」って飛び出してきたろモオオオ…おめえ知らねえのか？」
乳牛1「知らねえ」
乳牛2「知らねえって、モオオオ・・・幸せな奴だあ」

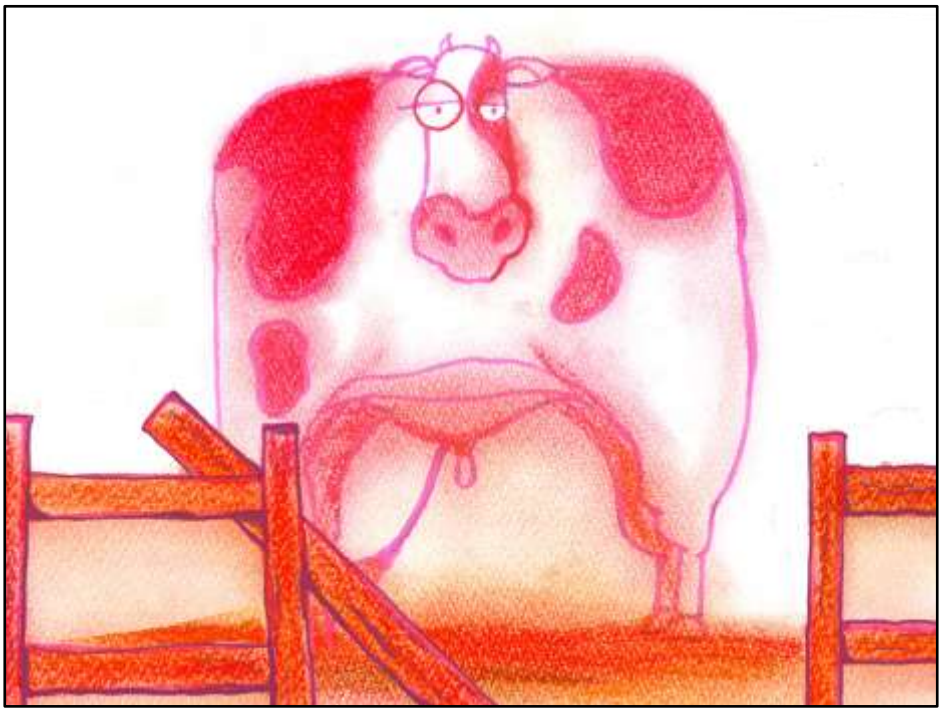
乳牛2「人間、夜明け前にみんな逃げてっただ」
乳牛1「みんなって・・・父ちゃんも母ちゃんもか」
乳牛2「そうだあ」
乳牛1「そうだって・・・モオオオ・・・朝飯はどうすんだ？」
乳牛2「朝飯はおいてあっど」
乳牛1「そりゃエかった」
乳牛2「モオオオ・・・おめえ食うことしか頭にねえのか」

乳牛1「それにしても今日の餌、やけに多いと思わねえか」
乳牛2「確かにな、いつもの3倍はあっぞ」
乳牛1「そうだな、なんかのお祝いだろ」
乳牛2「祝いって？」
乳牛1「知んねえ、こんなときに祝いもあんめえ」
乳牛2「やっぱ地震と関係あんのかなあ」
乳牛1「そんなわけねえべ」
乳牛2「じゃあなんだあ」
乳牛1「当分、帰ってこれねえってことでねえか。留守にするからこれでも食って食いつなげってことだろ」
乳牛2「そんなことは家の父ちゃんに限って絶対ねえ」
乳牛1「なんでえ」

乳牛2「オラが生まれて以来、うちの父ちゃんは一日たりとて休んだ日はねえぞ」
乳牛1「そりゃそうだども・・・」
乳牛2「昨年の暮れもそうだぁ。父ちゃん風邪ひいて、すげえ熱がでてたんだろ」
乳牛1「あの早く帰った日か？」
乳牛2「そうだあ。あの日父ちゃんは40℃の熱が出てたんだ。なのに文句ひとつ言わずおらたちの面倒見てくれたんだ。そんな父ちゃんが地べたがちっと揺れたぐらいでおら達をほったらかしにするわけねえ」
乳牛1「モオオオ・・・だったらなんなんだ？」



アナウンス「福島第一原発事故により、浪江町全域に避難命令がでました。福島第一原発から10km圏内の住民の皆様は速やかに避難してください。・・・・繰り返しお伝えします・・・・」
乳牛1「モオオオ・・・何を騒いでるんだ」
乳牛2「避難がどうとかいってぞ」
乳牛1「避難って・・オラたちどっか連れていかれんのか」
乳牛2「どこへ？」
乳牛1「知らねえ」
乳牛2「おら達はどこにも行かねえ。あれは人間に言ってっだ」
乳牛1「モオオオ・・・人間てひ弱だからなw」

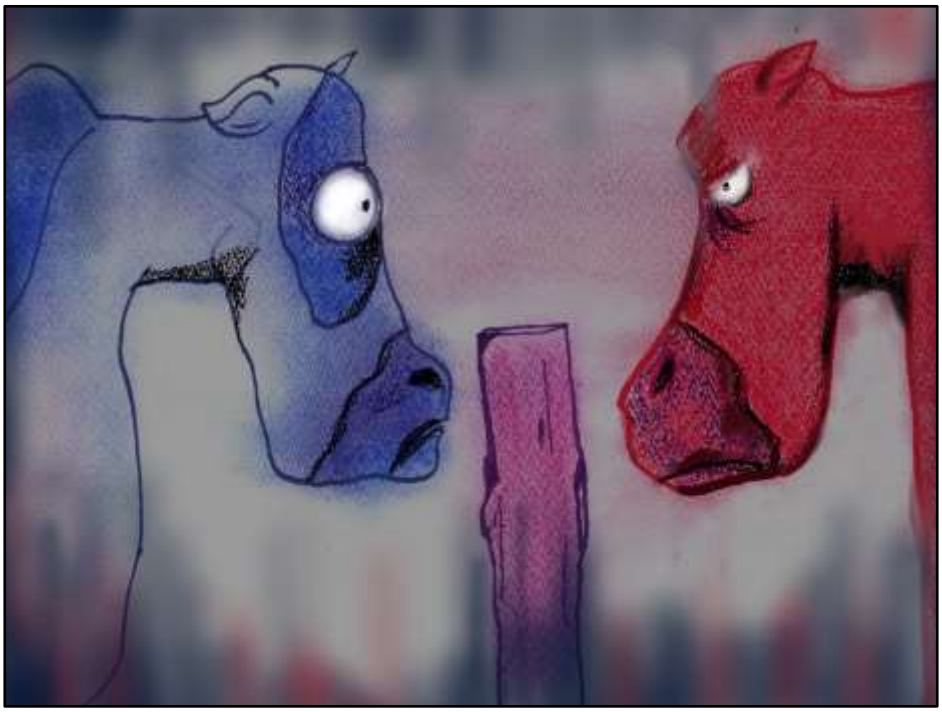


乳牛1「モオオオ…、見てみろ小屋の扉があいてっぞ」
乳牛2「開いてるって、ありえねえだ。あれほど慎重な父ちゃんがカギをかけ忘れるわけねえべ」
乳牛1「だども見てみろ、あいてっから」
乳牛2「外にでれんのか？」
乳牛1「そうみてえだ。出てみるか？」
乳牛2「やめとけ、あぶねえぞ」
乳牛1「何があぶねえんだ。でるべ。外は気持ちいええぞ。モオオオ・・・」

乳牛１「モオオオ…気持ちエエなあ、静かで、なんの音もしねえ」
乳牛２「そうだな、車の音、一つしねえ、こんな朝は生まれてはじめてだ」
乳牛１「そういえばそうだな、周りの田畑にも人間の姿、まるで見えねえ」
乳牛２「町のもん、皆が避難したってことか？」
乳牛１「そうみてえだ。でも、まあ、たまにはエエんでねえか。人間がいねえ、浪江もエエでねえか。自由にできっぞ。周りは牧草だらけ、当分、食うもんにも困らねえし、モオオオ・・・いっちょ走るか」

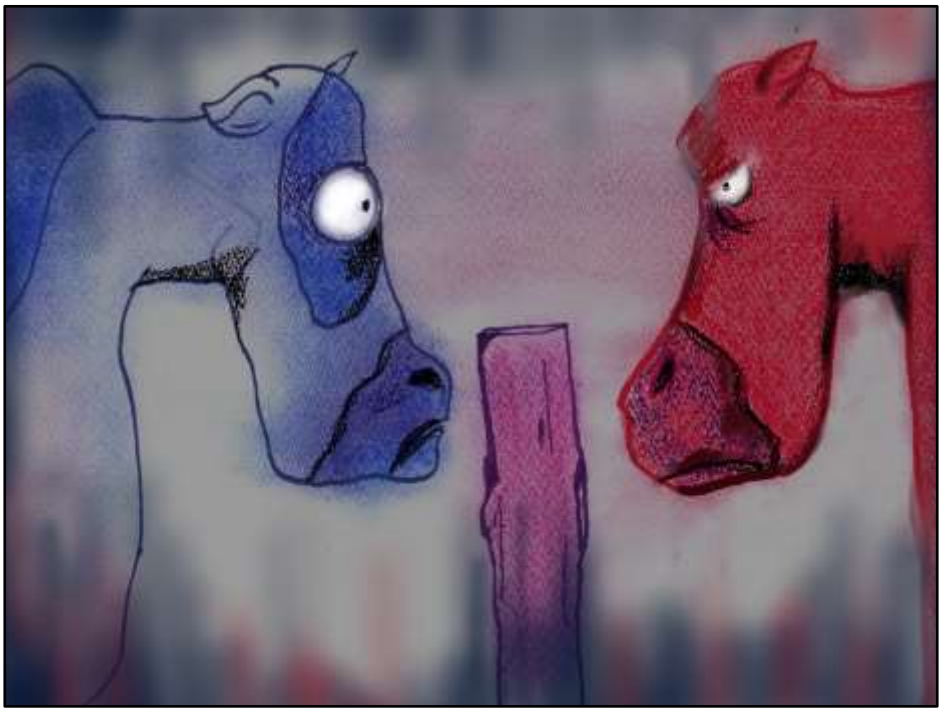
NA：人間たちが姿を消して1週間になります。
乳牛1「モオオオ…、もうあの日から一週間になるだども、まだ父ちゃん母ちゃん、かえってこねえだ」
乳牛2「モオオオ・・・父ちゃんどころか人間の姿を全くみねえ。こんなこと初めてだ」
乳牛1「ここ30年、365日一日も父ちゃんの顔を見ねえ日はなかったのによお」
乳牛2「食うもんは草食ってればエエけんどよう。水がいけねえなあ。雨水は泥の味がしてうまくねえしなあ」
乳牛1「そうだなあ、小屋のドアは開けてくれてんだども、柵があっから川までは行けねえしよお。こんな水ばっかり飲んでいると腹こわすべ」
乳牛2「おめえが腹壊す・・・モオオオ…ありえねえだろ」

ダダッダダ、ダダダッダ
肉牛「モオオ・・・モオオオ…」
ダダッダダ、ダダダッダ
乳牛1「モオオオ…あれ、あいつらなんだべ」
乳牛2「隣の家の奴らでねえか」
乳牛1「奴らって・・・外、出れんのか？」
乳牛2「みてえだな。でもよ、奴ら肉牛(ニクウシ)だろ」
乳牛1「やつら気が荒いからよ。柵ぶちやぶったんじゃねえか」
乳牛2「そんな勢いだな。たまってたんだな。まるで闘牛みてえだな」



肉牛「モオオオ…、モオオオ…おめえたち何やってだ外へでろ外へ」
乳牛2「外へって、おめえたちどうやって外に出たんだ」
肉牛「人間たちが地震の日の夜、出してくれたんだ。どこへでも行けってよ！」
乳牛2「そんなことってあんのか」
肉牛「あんのかも何も・・・こうして出れたんだ。気持ちエエど。人間のいねえ世界は最高だ！！」
乳牛2「やっぱ、人間、いねえのか？」
肉牛「そうだ。浪江には人っ子一人いねえ。どこへでも行き放題だ」
乳牛2「モオオオ…そんなことってありえんだろ。なんかの罠だべ。モオオオ…なんか陰で言っていたろ」

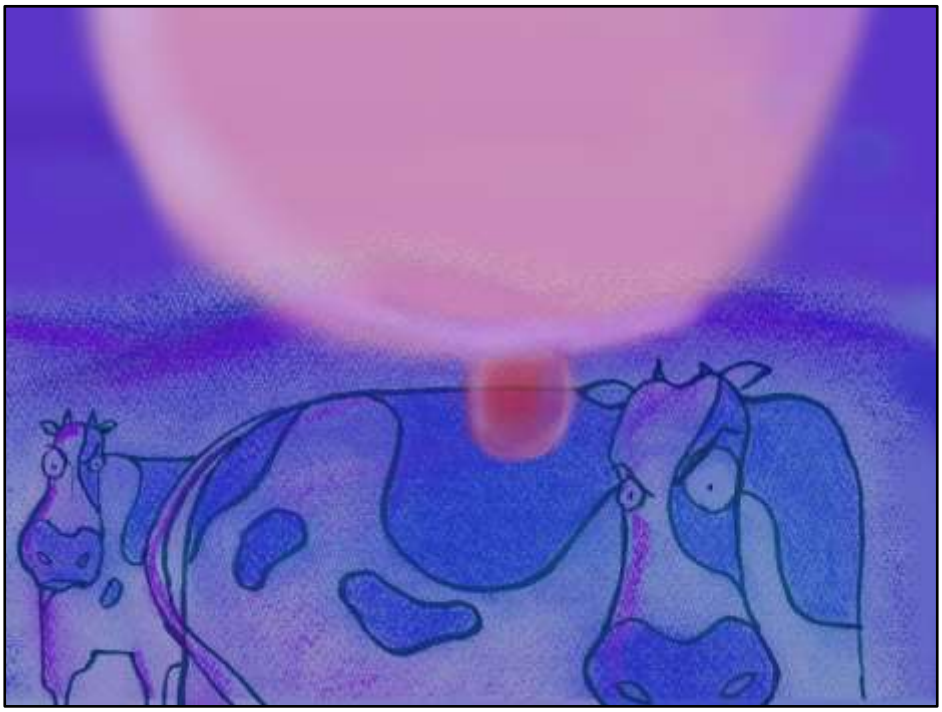
乳牛２「そういえば“原発さえなければ”とか何とか言ってたなあ」
肉牛「おう、なんだが泣いていた見てえだ」
乳牛２「なく？なんで人間がオラたちのために泣くんだ。ありえんだろ」



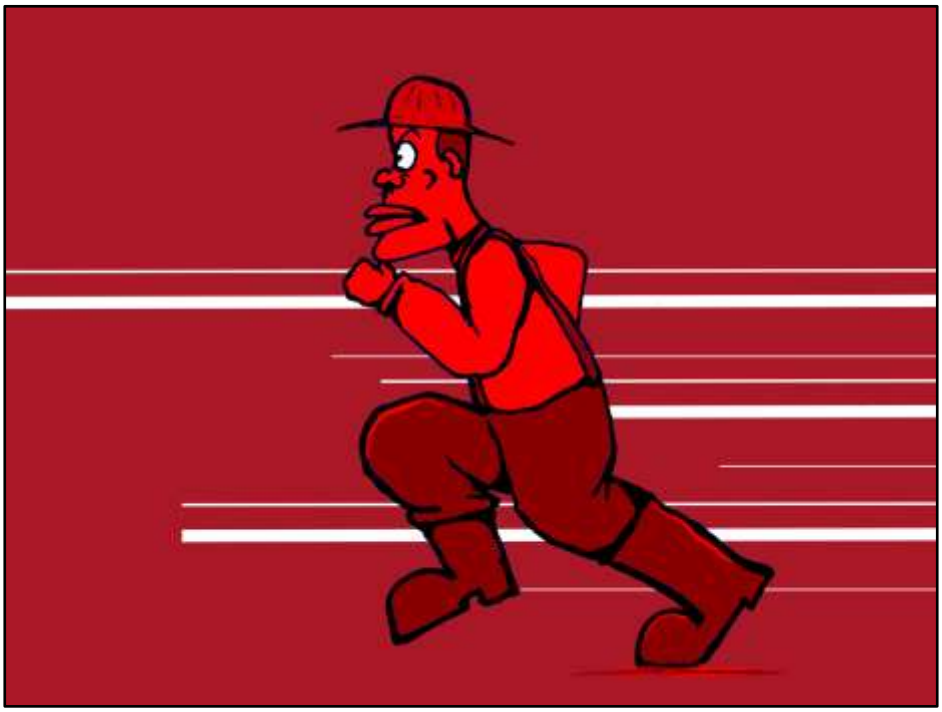
肉牛「モオオオ…しらねえよ。まあいいからおめえたちも外へ出てみろ。いろんなもんがあっから、楽しいぞ」
乳牛2「ああ、そうだろうな。でもよ。オラたちはもう少しここにいるよ、父ちゃん母ちゃんきっと帰ってくっから」
肉牛「モオオオ…まあ、おめえたち乳牛は人間がいねえとな～んもできねえからな。まあ、せいぜい人間と仲良くすればエエだ。オラたちはおめえたちと違って、人間と一緒だといずれ殺されっだ。こうなったらオラたちは少しでも長生きできるよう人間から逃げ回ってやる。

モオオオ…じゃあな」

乳牛1「それにしても静かだなあ」
乳牛2「ああ、人間がいなくなって10日目だ。人間たち本当にもう帰ってこねえのかなあ」
乳牛1「まあ、エエでねえか、気持ちええぞ。花は切れえだし、見てみろ梅が満開だ。そろそろ桜も咲くんでねえか」
乳牛2「でもよう、そろそろ牧草も少なくなったし、いい加減、かえってもらわねえと。

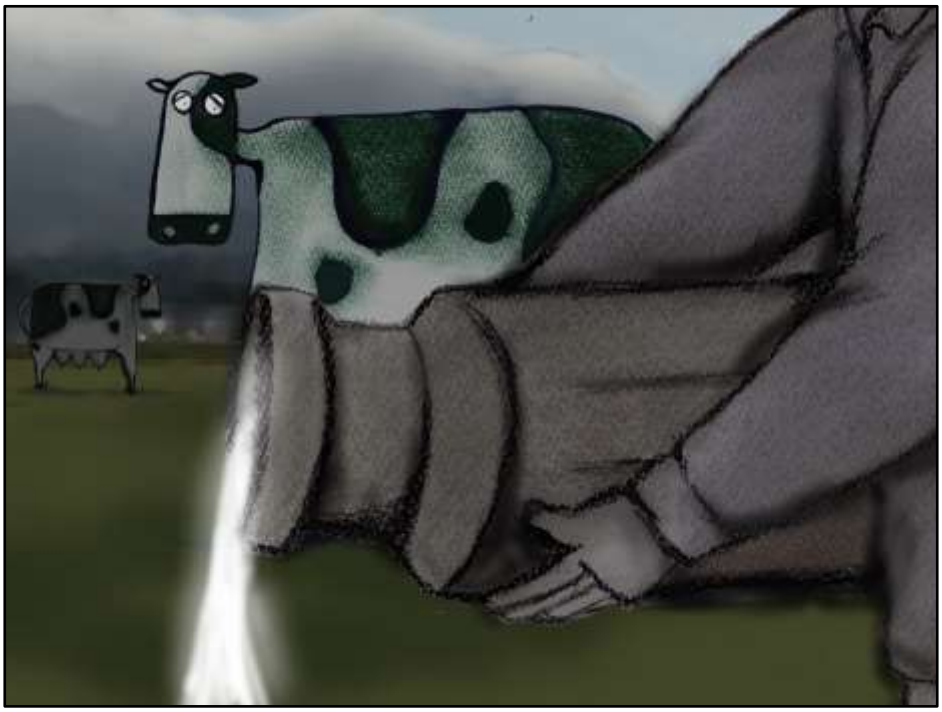


乳牛2「おっぱいが張って痛てえんだ。そろそろ乳もんでもらわねえと」
乳牛1「おめえもか、実のところオラもなんだ。三日前から痛くて痛くて」
乳牛2「なんだか、本気で心配になってきたぞ」
ブーン、ブオーン
乳牛1「あっ、車の音だ・・・・もしかして、モオオオ…」



キー、カシャ、タッタタタタ、タッタタタタ、タッタタタタ
乳牛1「誰か来るぞ。誰だ」
乳牛2「やっぱそうだ、父ちゃんだ」
乳牛1「やっと帰ってきただが」
乳牛2「モオオオ…くるくる、必死で走ってくるぞ。オラたちに会えるのが嬉しんだか」
乳牛1「ほなら、なんで10日もほったらかした・・・甘い顔すっでねえぞ」
乳牛2「そう言ううなって、人間には人間なりの事情ちゅうもんがあっだろ。それにおめえ、ついこないだまでは“人間がいねえと気持ちいい”って言っていたでねえか。ちょっと乳がはったぐらいで、そう悪くいううな。」

乳牛１「モオオオ…ああ気持ちエエ、乳しぼってもらうのはエエなあ」
乳牛２「随分、体重も軽くなった見てえだ。オラ、ひとっ走りしてくる」
乳牛１「そうだべ、行くべ行くべ、気持ちいいなあ」
乳牛２「オラのも早くしぼってもらえねえかなあ」
乳牛１「順番、順番」
乳牛２「でもよう、なんだか変だと思わねえか」
乳牛１「変だって、なにが？」
乳牛２「あれだよあれ」



ドぼドぼドぼ
乳牛2「せっかく採れた乳を捨ててっだろ」
乳牛1「モオオオ…わああ何ですてっだ？大切な乳を、許せねえ」
乳牛2「そうだ、さっきから採っては捨て採っては捨てなんだ。オラたちの父は父ちゃんの飯のタネだ、その大切な飯の種を早々、捨てるわけあんべえ」
乳牛1「モオオオ…な、おかしいなあ」
乳牛2「そうだろ、どう考えても変だろ」

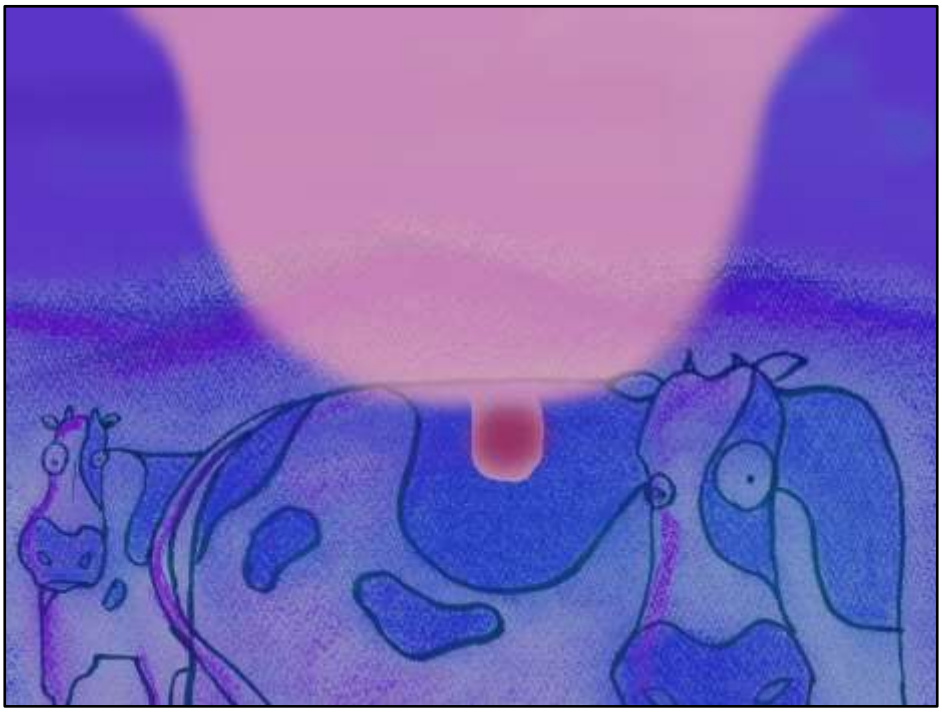
※電話口での会話
父「もしもし、オラだオラ・・・うん・・うん、今浪江だ・・・うん、何でいるかって？ばかやろう、帰るのが当たり前だろ。浪江の牛はみな生きてっだ！これまで飯食わしてくれたベゴたちだ。最後まで面倒見るのがあたりまえだろ」

父「なに？・・・・うん、うん、う・・・馬鹿言うでねえ。　わかった、もうおめえらとは話しねえ。おら一人でどうにかする！」
がっちゃん！
※牛たちの会話
乳牛1「おいおい父ちゃん！モオオオ…どうした父ちゃん、何を怒ってんだあ」
乳牛2「わからねえ。オラたちの仲間が次々と調子くずしまうからイライラしてんだろ」
乳牛1「なんだか帰れとかどうとかいってみたいだども」
乳牛2「・・・・モオオオ…やっぱ、どう考えてもへんだ。なんか人間の世の中でとんでもねえことが起きてるに違いねえ」

乳牛1「人間がおかしくなって一か月か・・・モオオオ…おお！あれはなんだ。変な恰好したやつらが次々やってくるぞ」
乳牛2「そういえば、昨日も山向こうの牛飼いの家に多くの人間がやってきてなんかしていたなあ」
乳牛1「ああ見た見た。注射みたいなもんをしてたろ」
乳牛2「そうだそうだ、注射打たれた牛は、しばらくすると眠りこけたる。あれは寝てたんでねえ。殺されたんだべ」
乳牛1「モオオオ…（驚いたように）なっなんで殺されるっだ」
乳牛2「そんなこと知るもんか。モオオオ…おっ！！あっあれだ、あれ見てみろあれ」

乳牛1「モオオオ…（驚いたように）抑えつけて何しよっていうんだ？」
乳牛2「わからねえ。見たろ、間違えねえ、人間の野郎、オラたちを皆殺しにつもりだ」
乳牛1「出荷されるんでねえか？」
乳牛2「出荷する眠らせたり、注射するわけあるめえ。それに注射で死んだ牛は穴掘って埋めるみてえだ」
乳牛1「埋めてるのか？」
乳牛2「あの小山、すべて埋められた牛たちだあ」
乳牛1「モオオオ…なんでだ？なんでだ？」

乳牛3「モオオオ…ケッ！あれが安楽死ってやつか(ニヒルに)」
乳牛1「安楽死？モオオオ…、なんだあ？」
乳牛3「オラも良く知らねえけんど、人間たちが注射打ちながらそんなことを言ってただ」
乳牛2「おお、聞いた聞いた。うちの父ちゃんが「安楽死させますっ」て言った役場の職員を首ねっこひっ捕まえて、“オラのベコはオラの目が黒いうちは指一本触れさせねえ”って叫んでいたやつだろ」
乳牛1「それだそれ、父ちゃん、泣いてたろ」
乳牛2「父ちゃんが泣く？モオオオ…そりゃ、あり得んだろ。親の死に目でも涙一つ流さなかった男だど」
乳牛3「そういえばよう。このまずい餌も安楽死と関係あるみてえだ」
乳牛1「どういうことだ？」

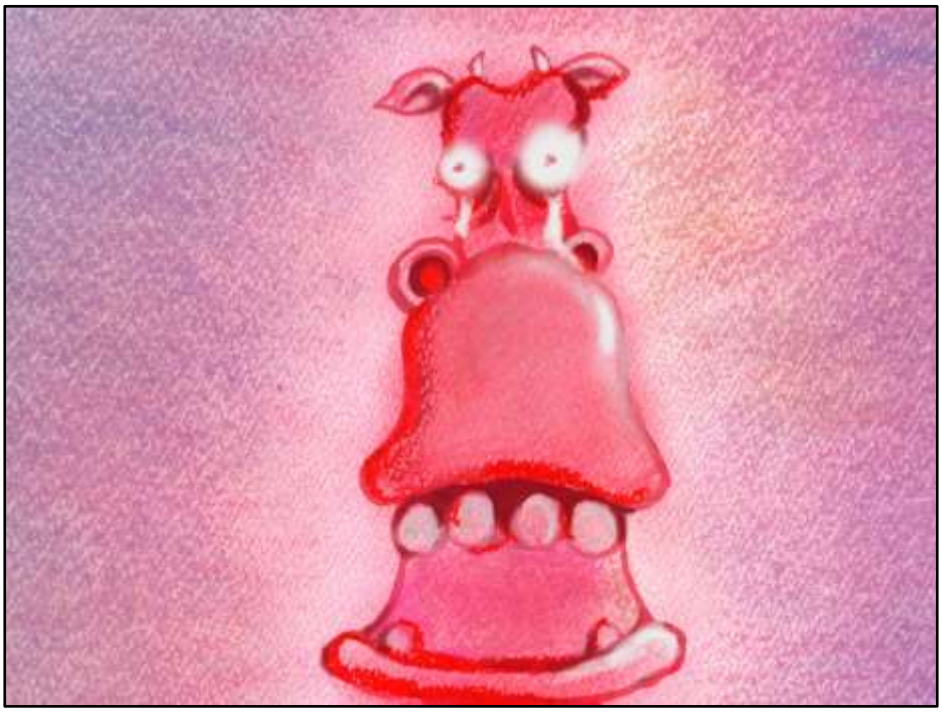


乳牛3「なんでもよう。牧草を発酵させるだろ。それを食うと乳が出ねえんだと」
乳牛1「だからか？最近、殆ど乳が張らねえと思っただ」
乳牛3「乳の出が悪いだろ」
乳牛1「そうだあ。殆どでねえ」
乳牛3「楽だろ？」
乳牛2「まあな。楽といえば楽だあ」
乳牛3「父ちゃんはなあ、一日でも長く、楽に生きれるようううにワザワザ、餌を発酵させてくれてんだべ」
乳牛1「喜ぶべきことなのかなあ？」
乳牛3「分からん、分からんけどよう。それも今日で終わりみてえだ」
乳牛1「終わりって？」

乳牛3「どうやらオラたちの番が来た見てえだあ。見てみろ注射器持った人間さ近づいてくっぞ」
乳牛1「番って？注射きって？なんだ？何されるっだ？」
乳牛3「決まってだろ安楽死だ？福島の牛は皆、殺されっだ」
乳牛1「何でだ？何でオラたち死ななければならねえんだ？」
乳牛3「知らねえよ。知るわけねえだろ！人間の考えなんてオラたちにわかるわけねえ」
乳牛2「モオオオ…でも一つだけ言えるのは父ちゃんは苦しいんだ、辛いんだべ」
乳牛1「何でだ？」
乳牛3「見りゃわかっだろ！！（叫ぶように）

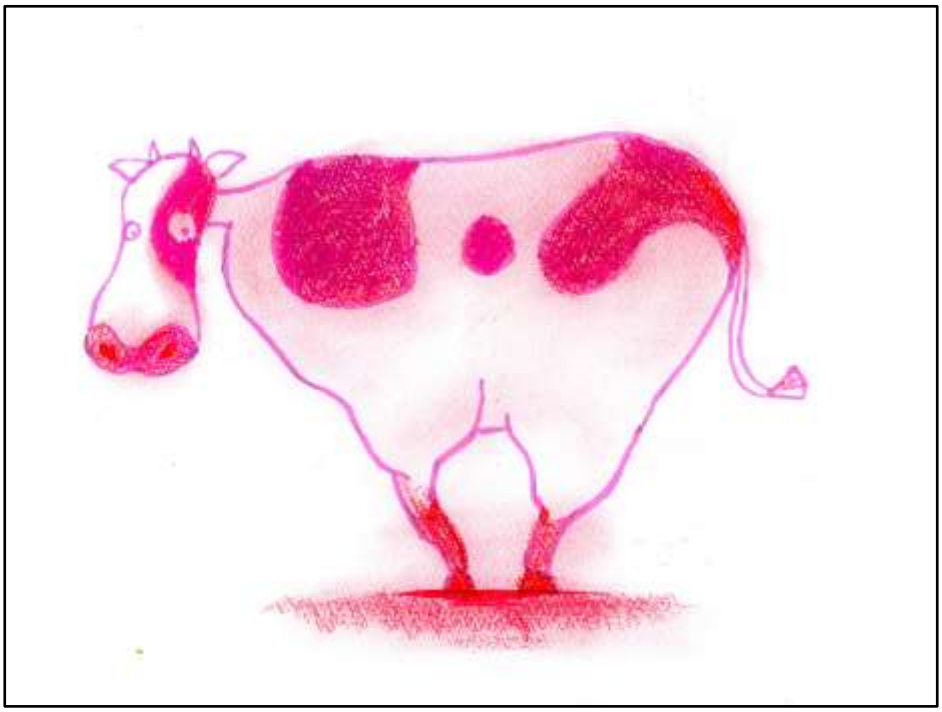
（泣き崩れる父ちゃん）
父「うおおお（人の鳴き声）うおおおお」
乳牛1「モオオオ…(悲しそうに) モオオオ…(悲しそうに)」
父「うおおお（人の鳴き声）うおおおお」

※次の牛の画面を半分引いたり戻したりしながら鳴き声を繰り返す。



乳牛1「モオオオ…(悲しそうに) モオオオ…(悲しそうに)」
父「うおおお（人の鳴き声）うおおおお」
乳牛1「モオオオ…(悲しそうに) モオオオ…(悲しそうに)」
父「うおおお（人の鳴き声）うおおおお」
乳牛1「モオオオ…(悲しそうに) モオオオ…(悲しそうに)」
父「うおおお（人の鳴き声）うおおおお」
乳牛2「モオオオ…(悲しそうに) モオオオ…(悲しそうに)」
※しつこいぐらい繰り返す。

菅政権は2011年5月１２日、東京電力福島第一原発から半径２０キロの「警戒区域」に残る家畜について、所有する農家の同意を得たうえで安楽死とするよう福島県知事に指示した。国と県の獣医師らが来週にも区域内に入り、処分を始めた。
農水省によると、警戒区域設定後に同県が調査したところ、牛約１３００頭、豚約２００頭の生存が確認された。東日本大震災発生前、２０キロ圏内には牛約３５００頭、豚約3万頭、鶏約６８万羽、馬約１００頭がいたが、多くが餌や水を得られずに餓死したとみられる。



音楽「天国からの手紙」